
ポケモンマスター

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンマスター

【著者名】

悲劇のM

N4955E

【あらすじ】

ポケモンの一次創作小説です。ちよつと真面目に書いてみました。

降り続いている雨はやみ、天が一人の戦いを見守るかのように太陽が顔を出した。

今、大勢の観客の視線が注ぐなか、大きなポケモンリーグ特設コロシアムに一人の選手が入場した。

一人はマントを纏つている長身の男。堂々と歩くその様からは、誰もが威風を感じた。歓声があがる。

もう一人は少年だった。赤い帽子に赤い服。先の男と同じ位大きな歓声があがる。

この世界には、ポケットモンスターという動物がいた。

人類は、核戦争で全てを失った過去がある。そしてその時の核放射能により、動物達が突然変異を起こした。

それがポケットモンスター。縮めてポケモン。

約百五十一種類の彼等は、種別毎に体内で様々なエネルギーを生み出す事が出来、それは生きるために使われる他、ポケモン同士の争いの最大の武器として使われていた。

そのポケモン達を人類が労力として、ペットとして、その他様々な目的で飼育するようになった。中でも、ポケモンと共に修行と称して各地に旅するポケモントレーナーという人達は、それぞれ自分達のポケモンの強さを競い合った。

そのポケモントレーナーの頂点を決める大会がポケモンリーグだ。三年に一回開かれる大会で、世界各地から腕に覚えのあるポケモントレーナーが何千人と集まる。

何千人のトレーナーの中勝ち進んできたレッドという名の少年は、前チャンピオンのワタルと対峙した。

「本当にやるんだな」

「ここまで来て俺が引き下がるとでも?」

「フンっ、威勢だけは良いようだな」

ワタルは視線をレッドから審判へと向けた。

「おい審判」

「はいっ。ポケモンリーグ決勝、挑戦者レッド対王者ワタル、試合開始！」

審判が旗を揚げると同時に響いた試合開始を告げる鐘は、観客の叫びに搔き消された。

「いけつ、リザードン」

レッドがベルトにつけてある三つの小さな赤いカプセルの内一つを投げた。そのカプセルはポケモンを一時的に封印するモンスターボールという道具で、戦闘の際に投げつけることでポケモンを出現させる事のできる、トレーナーにとつて最も身近な道具だ。それは質量保存の法則という科学の壁を打ち破った人類の英知の結晶とも言えた。

ソレが地面に落ち、赤い光があがると同時に、リザードンと呼ばれるトカゲが進化したような、翼の生えた巨大な龍が姿を現した。全身朱色の龍で、尻尾の先端には炎が灯っている。

「いってこい、カイリュー」

ワタルの方も同じカプセルを投げつけた。

そこから出てきたのは、レッドの出した龍よりも更に大きい龍だった。

全身が黄色人種の肌色に近く、頭には大きな角が一本。

対戦者に対し慈愛のこもったような優しい瞳を向け、自らの全長より少し小さい両翼を羽ばたかせ空を飛んだ。翼を羽ばたかせる度に、砂嵐が吹き荒れる。

だが、レッドもワタルも、砂嵐など無いかのように立っている。暫しの沈黙。一人のトレーナーは、互いにどう出るか神経を集中させていた。

「火炎放射だ！」

沈黙を破ったのはレッドだった。

刹那、リザードンの口から熱線が放射された。

そのスピードは凄まじかつた。音速の壁を軽く超え、一直線に力イリューのいる上空へととんだ。だが、カイリューはそれを余裕で避けた。

「カイリュー、破壊光線だ」

カイリューもリザードンと同じように口から光線が発射された。

「避けるリザードン」

リザードンは上空に飛び上がった。半秒後、リザードンが立つていた場所に光線が直撃した。

リザードンは立ち込める煙がはれた後、そこには巨大な隕石が降つてきましたかのようなクレーターが出現していた。

上空にいる彼等の間で空中戦が始まった。

一方が鋼をも切り裂く爪を突き立てる、一方はそれを後ろに避けて光線を発射する。もう一方も熱線を発射した。

それらは空中でぶつかり合い、途端、大きな爆発が起つた。

二つの強力な技が同時に放たれた故の惨事。

二匹の龍は、同時に地面に落ちた。

それぞれのトレーナーが見守る中、起き上がる龍はいなかつた。

「両者戦闘不能！次のポケモンを出してください」

審判が白旗を自分の正面に掲げた。

「もじれ、リザードン」

レッドはモンスター・ボールを突き出した。そこから出た赤い光がリザードンを包み込むと、一瞬の内にモンスター・ボールの中に吸収された。

「よくやつてくれた、ゆっくり休んでてくれ」

モンスター・ボールをベルトに戻した。

「さあ、早く次のポケモンを出せ」

ワタルが言つ。

「わかつてゐるよ」

レッドはもう一つのモンスター・ボールを取り出した。

「いっつ、ピジョット」

モンスター・ボールからは一頭の大鷲が飛び出した。鳥と疑うほど大きな体と両翼。人を乗せて飛ぶ事なんて彼にとつては容易だらう。

「いけっ、プロテラ」

ワタルが出したのは、一匹の黒鳥だった。

大きな翼に細長い胴に鋭い眼光。弱いポケモンが睨みつけられた
ら一瞬で逃げ出すに違いない。

「勝負開始！」

「ピジョット、空を飛べ」

レッドの命令で、ピジョットは上空へ飛んだ。

ピジョットの飛行速度は鳥系ポケモンでも五本の指に入る。空中
戦に持ち込めば、こちらの勝率は格段に跳ね上がる。レッドはそう
判断した。

案の定、プロテラもつられて上空へと羽ばたいた。

だが、ワタルはニヤリと笑みを浮かべた。

レッド達の頭上では、激しい戦いが繰り広げられた。

ピジョットが神速の体当たりを繰り出す。プロテラはそれを避け、翼
でカウンターをとり、ピジョットの胴体に直撃した。

「な、速い！」

「プロテラは鳥系ポケモンで最速のスピードを持つ。ピジョットよりもな」

「くつ・・・」

ピジョットはプロテラの圧倒的なスピードに翻弄された。刃のような
硬い翼でピジョットに物理ダメージを与える。

「ピジョット、下がつて体制を戻せ。あの技を放つんだ」

ピジョットは後ろに下がり、目を閉じた。精神を集中させているよ
うだ。

「諦めて試合放棄のつもりか？プロテラ、切り刻め！！」

プロテラは両翼を思い切り動かして風を起こした。それは風の刃と化
し、ピジョットへと襲い掛かる。

「今だ！ゴットバード！」

ピジョットは目を見開き、両翼を限界まで広げた。風の刃を突つ切り、そのままプロテラへと体当たり。そのスピードは半端ではなかつた。両者の距離はかなり離れていたにも関わらず、瞬間移動のような速度だ。それをプロテラが避けるのは不可能だつた。

両翼は、黒鳥を貫いた。

断末魔を上げながら、プロテラは地面に叩き落ちた。

「プロテラ戦闘不能！ワタルさんは次のポケモンを出してください」「ワタルは倒れているプロテラをモンスター・ボールに戻し、別のモンスター・ボールを投げた。

出てきたのは、先ほどと同じカイリューだった。

だが、今回のは大きさが段違ひだつた。先のカイリューの1・5倍はありそうだ。

「勝負開始！」

お互いの手を伺つた。カイリューはのそのそと歩いている。その度に地面が揺れた。

「カイリュー、吹雪を起こすんだ！」

ワタルの指令がカイリューにとどいた瞬間、カイリューは口から白い冷気を発した。

避ける猶予も無く、それはピジョットの右翼に直撃した。

冷気が直撃した右翼はあつという間に凍りついた。

「どうだ、零下二百度の威力は」

「ピジョット、戻れ」

ピジョットをモンスター・ボールに戻す。鳥ポケモンの翼が一つでも使えなくなるのは戦闘不能に同じ事を、レッドは知つていた。

レッドは最後の一つのモンスター・ボールに手をかけた。

「いけつ、ピカチュウ」

そこから出ってきたのは、なんと一匹の黄色いねずみのようなポケモンだつた。兎のような耳に、背中の縞模様と大きな尻尾が特徴的だつた。大きさは小型犬程しかない。

「フハハハ、血迷つたか、そんなネズミを出すとは」

「ふん、試合に集中しろ」

「カイリュー、そんなやつ叩き潰せ」

足を上げた。踏み潰そうとしているらしい。

それをピカチュウは難なく避けた。

カイリューが地面を踏んだ跡は、くつきりと深く残った。あの足に踏みつけられたらひとたまりも無い。

いや、踏みつけにかぎらず、カイリューの攻撃を一度でも受けたらピカチュウは間違いなく戦闘不能になるだろう。

そんなこと恐れる様子無く、ピカチュウはカイリューを睨み付けた。

「ピカチュウ、十万ボルトだ！！」

ピカチュウから黄色い電気が発せられた。カイリューに直撃。だが、少しひるただけで涼しい顔をしていた。

「電気を操ろうが、小さなねずみの攻撃などカイリューには無意味だ」

ワタルは高らかに笑った。

ピカチュウはまだ電撃をカイリューにぶつけた。

「無駄無駄！カイリュー、破壊光線！！」

口を開け、光線を発した。

ピカチュウはその隙にカイリューの背中をよじ登り、頭の上で形容し難い動きをした。

瞬間、空に黒雲が発生した。

「ピカチュウ！かみなりを放つんだ！」

すると、空から「ごろごろ」と音が鳴り、ピカチュウに雷が落ちた。

ピカチュウに落ちた雷は、ピカチュウの体内の電気と結合、さらには大きい雷となつてカイリューに当たつた。

これにはカイリューも強烈なダメージを受けた。

カイリューは倒れた。大きな地震が地響きが起こる。

審判は口を開けたまま呆然として、ハツと自分の仕事を思い出す。

「カイリュー戦闘不能！よつてこの勝負、レッドの勝ち」

新しい王者が生まれ、ロシアムが拍手と歓声に包まれた。

ワタルは悔しさから地面に座り込んだ。そこにレッドが歩み寄る。

「いい試合だった、またやろうぜ」

右手を差し伸べた

「ああ」

両者、握手を交わした。

「そんな戦いが、三年前にあったのか」

朱色の服に身を包む少年の名は「ゴールド」。

三年前のポケモンリーグチャンピオン戦の本を熱くなりながら読んでいた。

「って、このレッドって人僕と三歳しか変わらないんだ」

感嘆の声を上げる。

「でも、僕も結構ポケモン強くなつたからな、今ならそのレッドって人に勝てるかな」

その時、ゴールドは本のページの隅に気になる事が書いてあるのに気付いた。

「えっと、レッドに会いたい人は白金山つてところに行くと会える？」

それには続きがあった。

「但し、白金山は強い野性ポケモンが沢山出現する。本当に強いトレーナーだけ行くべし」

ゴールドは心躍った。

「よしそ、今から白金山についてレッドって人と直接ポケモン勝負しよう」

早速ゴールドは家に書置きを残して、地図とモンスターボールを持って白金山へと出かけた。

移動はマツハ自転車。名の通り最高速度はマツハに達する自転車だ。自動操縦に設定して、自転車に跨つた。

そして、彼は知らなかつた。次のページに大事な事が書かれていた事を。

一時間ほどして、白金山に着いた。

目に付く物は一面の緑。整備されていない未開の土地が白金山だ。

「ここが白金山かあ、よし」

自転車では山に登るのは困難なので、ゴールドは自転車を降りて急な坂道を登つていった。

そこは噂通りの強いポケモンが沢山出現した。だが、ゴールドはそれ以上に強いポケモンを持つていた。

順調に進んでいき、もうすぐ山頂だ。そこにレッドがいるだろう。ゴールドは手持ちのポケモンを確認して山頂に足を踏み入れた。

そこまで高くはなかつた。標高は地上三百メートルくらいだらうか。

そしてそこには、確かに一人の少年がいた。
赤い帽子に赤い服、レッドに間違いない。

「あの、僕とポケモン勝負してくれませんか？」

レッドはこくりと頷いた。

何故喋らないのか不審に思いながら、ゴールドはポケモンを出した。

レッドは予想以上に強かつた。ポケモンとトレーナーが一体となつて戦つていた。

だが、ゴールドも強かつた。的確な判断と指示でレッドのポケモンの攻撃を防ぎながら攻撃を繰り出す。どちらが勝つか分からない接戦となつた。

レッドのポケモンがあと一匹になるまで追い詰めることができたが、最後の一匹のピカチュウというポケモンが半端なく強かつた。最大の長所はすばやさ。高速移動を巧みに操り、攻撃の隙を与えたかった。

レッドのピカチュウは驚異的なすばやさと電撃を駆使して、ゴールドの手待ちのポケモンを次々と倒していく。

そこで最後の一匹、ゴールドもピカチュウを出した。

お互い能力はほぼ同じとふんでいる。これなら勝てるかも分からない。

互いのピカチュウはぶつかり合い、電撃をぶつけ合い、それを避けつづけた。

勝負は終わらなかつた。既に一時間が立つてゐる。それでもピカチュウ同士の戦闘は勢いを増していた。

ゴールドは疲労困憊しているのにも関わらず、レッドは涼しい顔をしている。

その時、一匹のピカチュウの動きが止まつた。一匹のピカチュウは少し出でた黒雲を見逃さなかつたのだ。

先ほどは高速で動いていたので分からなかつたが、今では一匹とも肩で息をしているのがはつきりと分かる。

空全体を黒雲が覆つた。

そして、一匹は同時に叫んだ。

途端に大きな二つの雷が落ちた。双方が互いに出した雷に擊たれたのだ。

一匹の黄色いねずみが、バタリと倒れた。

雷鳴だけが響く。

数秒程の沈黙の後に起き上がつたのは、ゴールドの方のピカチュウだつた。

ゴールドとレッドはそれぞれ自分の精一杯に戦つたポケモンに駆け寄り、戦いに疲れた者を、ひしと抱きしめた。

ゴールドは、今度はレッドの方へと歩み寄り、ズボンで手汗を拭き取つた。

「いい戦いでした、ありがとうございます」

右手を差し伸べた。一人のトレーナーが握手を交わした。

刹那

レッドとレッドのピカチュウが、粒子と化して天へと昇つていった。辺りが光に包まれた直後、ゴールドの頭の中に少年の声が聞こえた。

『チャンピオンになつた俺は毎日ポケモン勝負をしていたけど、俺を倒すトレーナーは現れなかつた。その後、俺は事故に遭つてポケモンと共に死んだ。俺を倒すトレーナーが現れないまま。死んでも死にきれないから、ここで俺を倒してくれるトレーナーが来るのをずっと待つていたんだ。

そして、君がそうだつた。

これで安心して成仏できる。ありがとう』

その事実に、ゴールドは地にへたれこみ、涙を流した。
そして、レッドに追悼の念を込め、手を合わせた。

その後、あるポケモントレーナーが修行のため白金山を訪れた。

山頂に着くと、何故かそこは光に包まれて明るさがあつた。中央には簡単な石碑のようなものがあつる。

そこには字が書いてあつた。否。彫られてあつた。
トレーナーは目を凝らしてその字を読んだ。

『永遠の王者、ポケモンと共にここに眠る』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4955e/>

ポケモンマスター

2010年10月10日03時30分発行